

日蓮聖人画像に描かれる六器について

藤村 泰介

一、問題の所在

桃山時代を代表する絵師・長谷川等伯は、若き頃「信春^①」と名乗り、絵仏師として北陸地方を中心に活動していた。等伯は熱心な法華の信者であったことが知られ、法華寺院に数多くの仏画を残し、その中には宗祖日蓮聖人を描いた作品も伝わっている。

等伯が描いた日蓮聖人画像として、富山・大法寺本、石川・妙成寺本^②、石川・実相寺本、石川・本住寺本が現在確認され、また単独画像ではないが京都・妙傳寺に所蔵される法華経本尊曼荼羅図^③にも日蓮聖人が描かれている。これら五点の作品ではいずれも、日蓮聖人の説法する姿が描かれている。日蓮聖人の前には机が置かれ、その上に鈴・法華経・柄香炉などが置かれ、妙成寺本ではそれらに加えて数珠が置かれている。この中で大法寺日蓮聖人画像には、日蓮聖人の前に置かれた机の前に、さらに小さな机が置かれ、その机の上に香炉・燭台・花瓶の三具足が置かれ、その三具足の前に左右に三個ずつ、合わせて六個の同じ形をした仏器が置かれている（図1）。また本住寺日蓮聖人画像、妙傳寺法華経本尊曼荼羅図では三具足ではなく香炉と花瓶一対が置かれ、その前に左右に三個ずつ同じ形をした六個の仏器が置かれている。この同じ形をした六個の仏器は密教法具の六器の

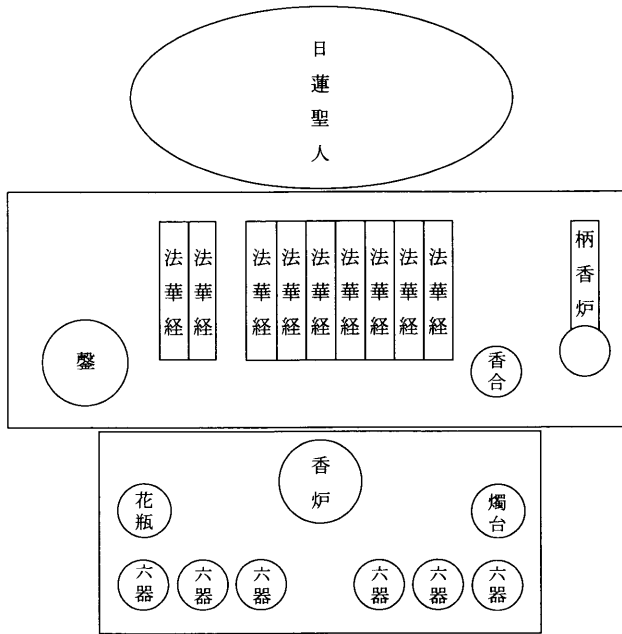


図1 大法寺 日蓮聖人画像

ように見られる。日蓮聖人画像に描かれたこの仏器が六器であるとするなら、現在は法華寺院において使用されていない密教法具である六器が、これらの作品が描かれた当時、実際に使用されていたのだろうか。

日蓮聖人画像に描かれた六器について考えてみたい。

二、仏具の中の六器

仏具は用途によって分類される。石田茂作氏は『仏教考古学講座』の中で仏具を、次の六種類に分類されている。

- ① 荘厳具 — 仏の偉徳をより効果的に示すために、礼拝の仏像の周辺を荘厳するもの。
- ② 供養具 — 香・花・燈・飲食用具・高坏・献物台等供養関係の器具をいい、

堂内のものだけでなく屋外の燈籠等も含む。

③梵音具 — 仏教用具として発音する一切の用具を含めたもの。

④僧具 — 僧侶が着用するものや持ちものなど。

⑤密教法具 — 金剛杵・金剛鈴・輪宝・羯磨・大壇等を合わせ一具をなすもの。護摩壇用具もこれに属する。

⑥その他 — 經典関係の経帙・経籤・経箱・経櫃・経机、説教用高座、位牌壇等。

この中で六器は密教法具に分類されている。

また『日蓮宗事典』の仏具の項で、仏具は次の四種類に分類されている。

①莊嚴具

②供養具

③鍵稚具（梵音具）

④僧具

（この分類に納まらないものもあるので、「その他」を付け足す必要がある）

この分類の仕方は、石田茂作氏の分類の仕方とほぼ同じであるが、法華寺院で使用されない密教法具は除かれている。

松村寿嚴氏は「日蓮宗と仏具 — その受容時期を視点として —」の中で、仏具を莊嚴具・梵音具、その他を一括して法具とする三つの範疇に分類され、それぞれの仏具について記述されている。その中で、大法寺日蓮聖人画像など六器と見られる仏具が描かれている作品を取り上げながらも、それら六器と見られる仏具についての記述はない。管見において大法寺日蓮聖人画像を取りあげた他の文献にも、日蓮聖人の前に置かれた六個の同形の仏

器について記述のないものが多いが、坂輪宣敬氏は、これら六つの仏器を「六器」とみなしている。⁽⁵⁾また石川県七尾美術館が毎年開催している「長谷川等伯展」の図録でも、近年、これらの仏器を指して「六器」との記述が見られる。⁽⁶⁾

三、密教法具の中の六器について

密教法具は、その用途から大きく四つに分類することができる。⁽⁷⁾

- (一) 敵を殺傷する武器から転じ、人間の心の中に巣くう煩惱を打ち破る意味を持つもの。金剛杵・輪宝・羯磨などがこれにあたる。
- (二) 音を発して威嚇するなどの用途から転じて、人間が本来持っている眠れる仏性を呼び覚ます意味で用いられるもの。金剛鈴がこれにあたる。
- (三) 他の動物にはなく、人間だけの技術である「焼く」ということを用いて、身にこびりついた俗塵を焼き払うことよって清浄な身心をあらわし示すことを象徴する法具。護摩檀・護摩炉・護摩杓等の護摩具がこれにあたる。
- (四) 修法の完遂のために道場を清めて荘厳し、そこへ降臨してきた諸仏諸天を供養するための供養具。供養具は多彩で、火舎・六器・花瓶・飯食器・灑水器・塗香器などがこれにあたる。

またこの分類で(一)、(二)、(三)に入る金剛杵・輪宝・羯磨、金剛鈴、護摩具などは根本法具と呼ばれ、(四)の供養具

は補助的道具とも呼ばれている。六器はこの補助的道具と呼ばれる供養具に分類される。

四、六器の形態

六器の形態は、高台のついた鏡と、その下に台皿を備える形が通例で(図2)、六個を一揃えとして用いるたぬ六器(「ろっき」または「ろくき」と呼ばれている)。

しかし「六器」の名称がいつ頃から使われ始めたかは明らかではない。那智経塚に関する資料で大治五年(一一三〇)の奥書を持つ『那智山灌本金経縁起』(明暦二年(一六五六)写)の密教供養具の項に

閼伽器四前一前各六口

との記述がある。また正和三年(一一三二)の刻銘を持つ奈良県西大寺伝来の金剛盤(奈良国立博物館蔵)裏面の銘文には「真言堂東壇佛具事」として

閼伽器四具四口

とするされている。これらのことより、平安時代から鎌倉時代にかけては六器を総称して「閼伽器」と呼んでいたと考えられている。⁽⁸⁾

また六器が最初から六個で一揃えであったかどうかは疑わしく、弘法大師請来目録(大同三年(八〇六))には

金花銀閼伽蓋四口

とあり、また『妙法蓮華経観智儀軌』⁽⁹⁾には

於壇四門兩辺各置二閼伽器、満盛香水、中著鬱金、泛諸時花、極令香潔、

日蓮聖人画像に描かれる六器について

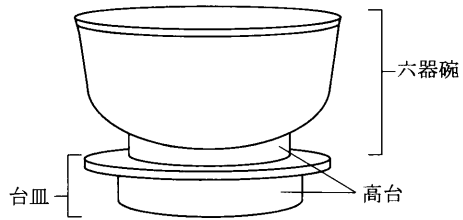


図2 素文六器

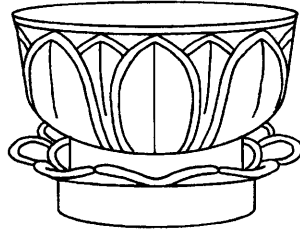


図3 蓮弁飾六器

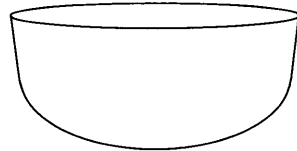


図4 片供器

六器は金銅鑄製で、その形状から、素文六器、蓮弁飾六器、片供器の三つに分けることができる。

・素文六器 (図2)

装飾をほどこさない素文のもので、この形式の六器が多い。

・蓮弁飾六器 (図3)

碗の外側の面と台皿の上の面に八葉蓮弁の彫刻を施したものの。慈覚大師請来形と呼ばれる。台皿は輪宝・羯磨の台皿を小さくしたような形で、台皿の高台にさらに格狭間を透かしたものもある。この蓮弁飾りを施した六器は天台系で用いられることが多いが、真言寺院にも遺品が伝えられている。

と記されている。六個を一揃えとして使われ始めたのがいつ頃か明らかではないが、古い資料では平家納経安樂行品の紙背に、火舎(香炉)・花瓶とともに六器が描かれており、また遺物として最古のもので大治五年(一一三〇)を基準とする和歌山県那智経塚の出土品は六個を一揃えとして出土している。これらのことから、平安時代末期には六個で一揃えという形に整備されていったと考えられている¹⁰⁾。



図 5

・片供器 (図 4)
 台皿を備えず、碗の底に高台をつけない丸底のもの。三昧耶戒場で大阿闍梨が弟子に、闕伽・塗香・華鬘を授けて諸尊供養の法を教えた後に、戒を受けさせたり、諸功德を得させるために行う特殊な修法の時に用いる。向かって右の前供の分と、向かって左の後供の分のうち、前供の三器のみを用いて作法をするために片供と呼ばれる。

五、大法寺日蓮聖人画像における六器の用法

六器は修法の壇上で火舎 (香炉) を中心にして、左右に三器ずつ並べられ、内側より闕伽、塗香、華鬘の器とされている (図 5)。闕伽器には浄水、塗香器には香、華鬘器には花を盛るのが本来の形であるとされるが、実際には法流によって違いがあり、花の代わりに檜の葉を盛ることが多く、その葉の盛り方や枚数なども様々な形がある。

密教では大檀の四辺に四面器を備えるのが本来の形であるが、大檀に対して一面器だけを献ずる略檀形式の密檀というものがある。密檀の上には大檀供の中の必要最小限度のもの、すなわち火舎 (香炉) と闕伽・華鬘・塗香の六器、両端に飯食器 (仏飯器)、花瓶、金剛鈴、金剛杵、金剛盤が置かれる。密檀供の配列は、天台宗と真言宗で汁・餅・菓などの供物を置く場所に違いが見られる。天台宗では供物が一面器の外側に置かれ、真言宗では供物が一面器の内側に置かれる (図 6・図 7)。

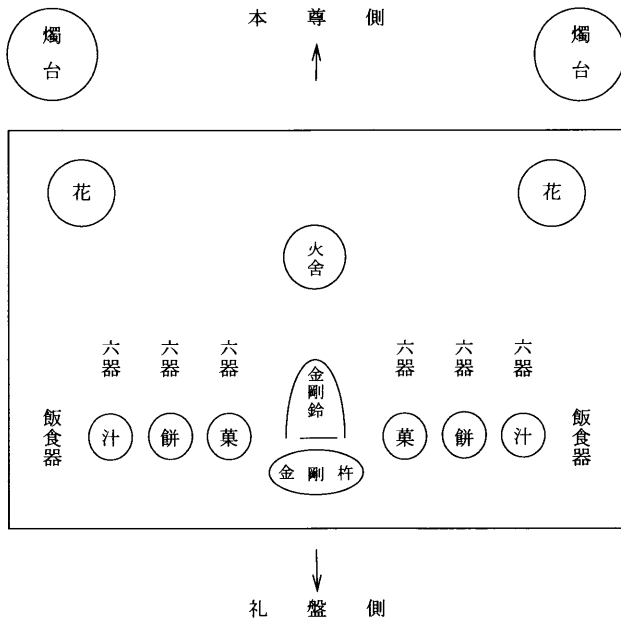


図6 密壇供配列図 (天台宗)

天台宗の密壇上に置かれる仏具のうち金剛杵・金剛鈴といった修法の道具と汁・餅・菓・飯の供物を除き、大法寺日蓮聖人画像に描かれる机上の仏具の配置と比べてみると、天台宗の密壇上には火舎（香炉）と花瓶一対が置かれるのに対し、大法寺日蓮聖人画像が香炉・花瓶・燭台の三具足となっていることを除けば、密壇上での供養具（火舎・六器・花瓶）の配置は、大法寺日蓮聖人画像に描かれる仏具の配置とはほぼ一致する（図1・図6）。このように形態や、机上に置かれる配置から見ても、大法寺日蓮聖人画像に描かれる仏具は六器と見て間違いないと考えられる。

また、六器が並べられる密壇と本尊の位置関係を見ると、六器側に礼盤が置かれ、花瓶側に本尊が置かれる（図6）。これを大法寺日蓮聖人画像（図1）にあてはめて考えると、日蓮聖人は本尊側に位置し、見ているものが礼盤側に

位置することになり、大法寺日蓮聖人画像の三具足及び六器は日蓮聖人の礼拝供養のために描かれたものと考えられる。

六、六器が描かれる画像について

大法寺日蓮聖人画像以外で六器が描かれる作品を挙げてみる。

- | | | | |
|----------------------|-----------|-------------|-------------------------|
| ①石川・本住寺 | 日蓮聖人画像 | 十六世紀 | 長谷川信春(等伯)筆 |
| ②京都・妙傳寺 | 法華經本尊曼荼羅図 | 永祿十一年(一五六八) | 長谷川信春(等伯)筆 |
| ③静岡・妙法華寺 | 日蓮聖人画像 | 鎌倉時代(十四世紀) | |
| ④石川・妙成寺 | 日蓮聖人画像 | 慶長十七年(一六二二) | |
| ⑤石川・本土寺 | 日蓮聖人画像 | 寛永六年(一六二九) | 長谷川等誉筆 ^① |
| ⑥福井・本境寺 | 絵曼荼羅(A) | 応安元年(一三六八) | |
| ⑦福井・本境寺 | 絵曼荼羅(B) | 十四世紀 | |
| ⑧京都・妙顕寺 | 日像聖人画像 | 南北朝時代十四世紀 | |
| ⑨日禰上人画像 ^② | | 一五〇〇年代後半 | 長谷川信春(等伯)筆 |
| ⑩京都・立本寺 | 日経上人画像 | 室町時代(十六世紀) | 長谷川信春(等伯)筆 ^③ |
- 各作品の六器の配列を示したものが、次の図8である(④は六器を示す)。
- ①本住寺日蓮聖人画像、②妙傳寺法華經本尊曼荼羅図は、等伯筆の六器が描かれる日蓮聖人画像である。③法

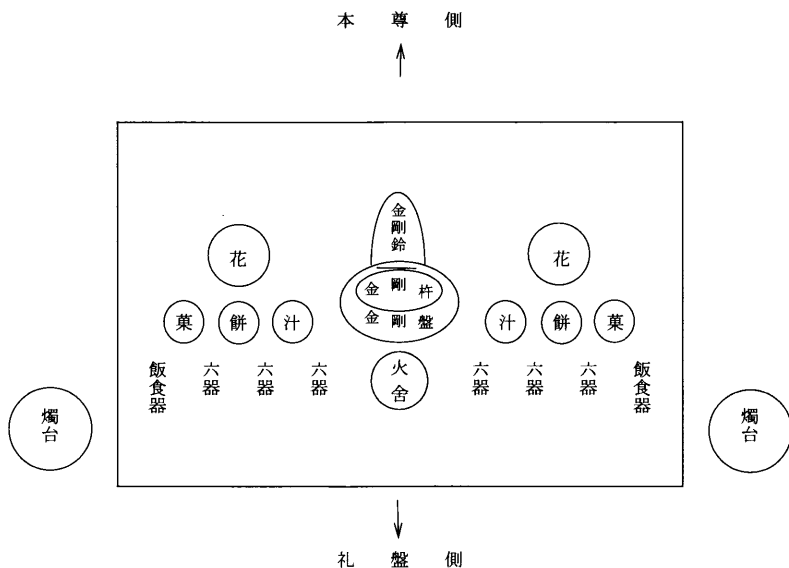


図7 密檀供配列図 (真言宗)

華經本尊曼荼羅図は日蓮聖人の単独画像ではなく、多くの諸尊が五段に描かれ、日蓮聖人は下から二段目中央に描かれている。

③妙法華寺、④妙成寺、⑤本土寺の日蓮聖人画像は、等伯以外の作品で六器が描かれる日蓮聖人画像である。

また⑥、⑦は二作品とも福井県本境寺に蔵される絵曼荼羅で、便宜上、応安元年銘を持つ作品⑥を絵曼荼羅(A)、制作年の銘がない作品⑦を絵曼荼羅(B)とする。絵曼荼羅とは日蓮聖人の十界勸請大曼荼羅を

絵にあらわしたものをいう。この二作品では日蓮聖人とともに他の聖人の前にも六器が描かれている¹⁴⁾。

日蓮聖人が描かれる画像以外で六器が描かれる作品が、⑧妙顕寺日像聖人画像、⑨日禪聖人画像、⑩立本寺日経上人画像である。

これら①～⑩の作品は日蓮聖人をはじめ、描かれる像主が説法をする姿を描くこと、また描かれている六器は装飾をほどこさない素文六器であることが共通している。

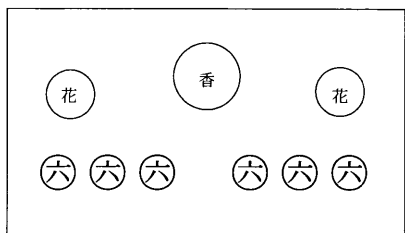


図8-② 妙傳寺 法華經本尊曼荼羅図

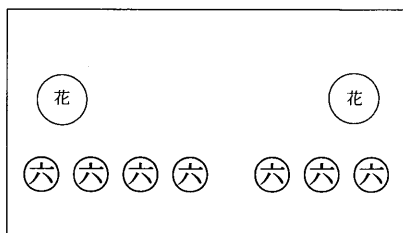


図8-① 本住寺 日蓮聖人画像

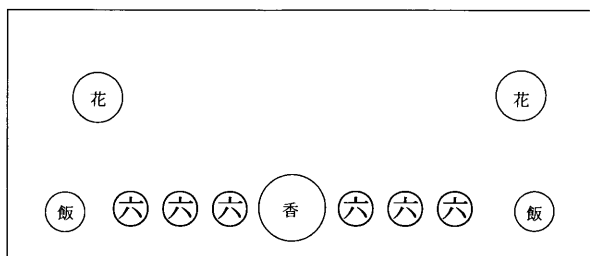


図8-③ 妙法華寺 日蓮聖人画像

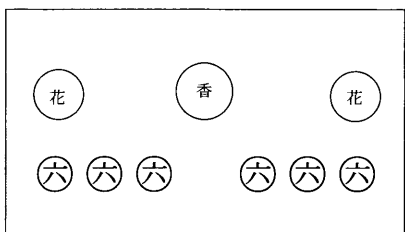


図8-⑤ 本土寺 日蓮聖人画像

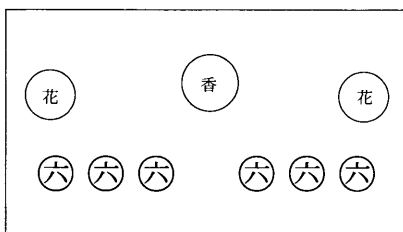


図8-④ 妙成寺 日蓮聖人画像

この中で、③妙法華寺画像は、日蓮聖人の説法の様子を描いた説法図としては最古のもので、鎌倉時代の作品とされている。

文保元年（三二七）の『玉沢手鑑草稿』の日昭讓¹⁵状には

一、生御影、絵ハ大蔵也、居子ニテ御説法、

曾谷夫婦聴聞之体也、

御經第六卷ノ初、宗祖

御筆也、授与法名法蓮、

蓮華比丘尼、文保元年

十一月十六日

とあり、この「宗祖御筆也」が真実であれば、日蓮聖人在世中に描かれたとい

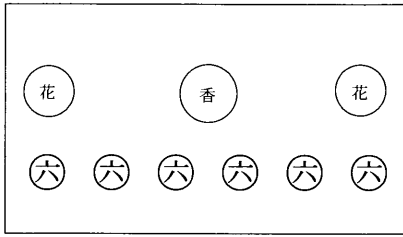


図8-7 本境寺絵曼荼羅 (B)

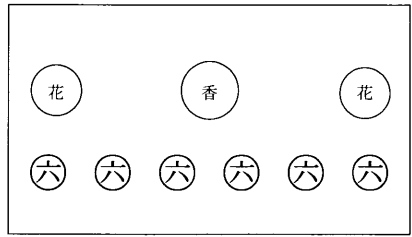


図8-6 本境寺絵曼荼羅 (A)

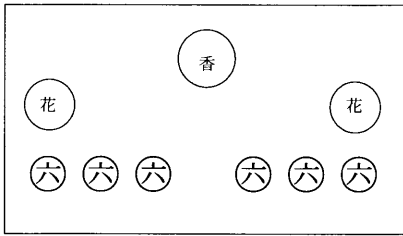


図8-9 日禪上人画像

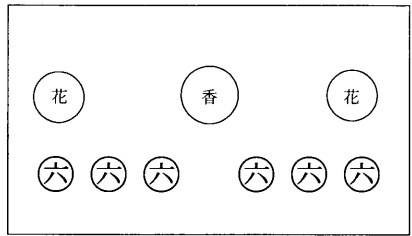


図8-8 妙顯寺日像聖人像

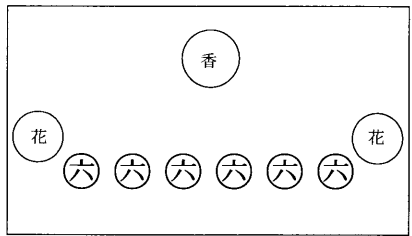


図8-10 立本寺日經上人画像

う可能性もあると指摘される作品である。¹⁶⁾
 この作品では等伯筆大佛寺画像のように日蓮聖人の前にはなく、画面の左上方に描かれる釈迦仏・四菩薩の一尊四土の前に六器が描かれている。¹⁷⁾さらにこの作品では六器の外側に仏飯器(飯食器)が置かれ、香炉・六器・仏飯器は横一列に並べられ、その後方に花瓶一対が置かれている(図8-3)。³⁾この配置は真言宗の密壇具の火舎(香炉)・花瓶・六器・飯食器の配置(図7)と一致する。妙法華寺画像と並び鎌倉

時代の作とされている浄光院日蓮聖人画像は同じく説法図であり、日蓮聖人の前に法華経が置かれた経机があり、さらにその前に小さな机が置かれているが、その小さな机には花瓶しか置かれていない。

一尊四士の前に六器等の供養具が置かれる③妙法華寺日蓮聖人画像を除けば、他の作品は像主の前の机に鈴・法華経・柄香炉などが置かれ、その前にもう一つ小さな机を置いて、その上に香炉・花瓶一对とともに六器が置かれている点が共通している（大法寺画像は三具足と共に六器が置かれている）。ただし①本住寺日蓮聖人画像は、画面の痛みが激しく判別し難いが、六器と共に机上に置かれるはずの香炉は描かれていない（図8—①）。

花瓶の位置は香炉の横、もしくは香炉の若干前に置かれている作品が多いが、③妙法華寺日蓮聖人画像では花瓶が香炉より後方に置かれ、⑩立本寺日経上人画像では花瓶が香炉の横でなく、かなり前に置かれている（図8—⑩）。

②妙傳寺法華経本尊曼荼羅図は日蓮聖人が説法する姿を正面から描いている。描かれる香炉は三脚を持たず、他の作品に描かれる香炉とは形が異なり特徴的である。広島・妙成寺の宝塔絵曼荼羅にも正面から見た日蓮聖人が描かれ、その前には鈴・法華経が置かれた机があり、さらにその前に小さな机が置かれているが、その上には香炉と花瓶一对だけが置かれるだけで六器は描かれていない。

⑤本土寺日蓮聖人画像に描かれる六器は碗の部分が薄く、高台の部分が高くなっている、六器として形のバランスがかなり崩れている。

⑥本境寺絵曼荼羅（A）は、向かって右に日蓮聖人・日朗聖人、左に日像聖人、大覚大僧正が描かれ、⑦本境寺絵曼荼羅（B）は、画面下に右から日朗聖人、日蓮聖人、日像聖人、大覚大僧正が横一列に並べて描かれ、それぞれの前に六器が描かれているが、六器が左右に三個ずつ置かれるのではなく、ほぼ等間隔に置かれている

(図8—⑥、⑦)。また⑩立本寺日経上人画像も六器はほぼ等間隔に置かれている(図8—⑩)。香炉を中心に左右に三個ずつ並べるといふ六器の大きな特徴が、制作者の意識の中で薄くなっていた可能性が考えられる。

七、等伯作品の特徴

前項で挙げた作品に描かれる六器の形態を見ると、描かれる六器のすべては装飾をほどこさない素文六器であるが、大法寺と本住寺の日蓮聖人画像二点と、日禪上人画像、これら等伯が描いた三点の作品に描かれた六器は、鏡の口縁の部分が平らではなく山形のようにギザギザになっている(図9)。また長谷川等誉の作品とされる本土寺日蓮聖人画像でも六器の口縁は同じく山形のようにギザギザになっている。

なぜ鏡の口縁部がこのような形になっているのか。鏡の口の部分の形は蓮華文に似ている。しかし伝わっている六器で蓮弁飾が施されたものは鏡の外側の面と台皿の上の面に八葉蓮弁の彫刻を施したものであり(図3)、口縁部が蓮弁の形になっているものは伝わっていない。

また鏡の口縁のギザギザの部分(図9—Aの部分)は鏡の胴の部分と異なる色彩が施されていることが確認できる。六器は闍伽器・塗香器・華鬘器が各二器ずつ置かれるが、このうち華鬘器には花を盛り供養される。また華鬘器には花の代わりに櫛の葉を盛るなど多様な形がある。それを加味すれば大法寺日蓮聖人画像などに描かれる六器は花、もしくは櫛を盛っている様子が描かれているのではないかと考えられる。しかし、そうすると六器一具すべての口縁部がギザギザであり、すべてに花、もしくは櫛が盛つてあるということになる。

日蓮聖人画像など法華寺院に蔵される説法図以外に、他宗のもので六器が描かれる祖師の画像は管見の限り見

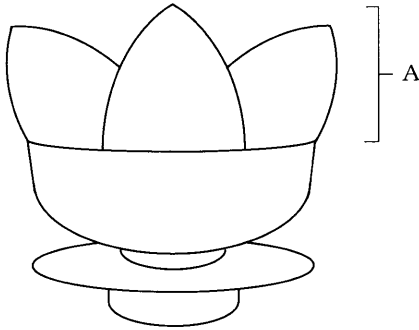


図9

当たらない。しかし、絵伝の中には、六器が描かれる作品が複数ある¹⁸⁾。その一つに「法然上人行状絵図」(知恩院蔵)がある。「法然上人行状絵図」で六器が描かれる箇所は十八箇所あり、六器は香炉・花瓶とともに机の上に置かれ、香炉の形に違いはあるが机上での配置の仕方は等伯の大法寺日蓮聖人画像などと同じように配置されている場面が多い。卷三十六第四段、勝尾寺で法然の弟子・聖覚法印が法然施入の一切経を供養する法要の導師を勤める場面。そこに描かれる六器は、上部の部分(図9-Aの部分)に緑色の彩色が施されており、この部分は花ではなく楡の葉であることが確認できる。これによって等伯が描いた大法寺日蓮聖人画像は、楡の葉が浮かべられている六器が描かれていると考えられる。

八、おわりに

等伯が描いた日蓮聖人画像を中心に、作品内に描かれた六器について考察してみた。

画像に描かれるように六器は当時実際に供養具として法華寺院で使用されていたのか、それとも六器は絵の中に描かれただけなのだろうか。

作者が生きた時代の供養風景が、画像に描き出されるといふことは十分に考えられる。京都本圀寺蔵『日蓮聖人註画賛』には日蓮聖人葬儀の場面が描かれ、その中に繞・鉢による供養が描かれている。しかし、この葬送の情景の抛り所とされた『宗祖遷化記録』¹⁹⁾には、この繞・鉢のことは記さ

れておらず、これらは作者が生きた時代の供養風景によって付け足されたものと考えられている。⁽²¹⁾ だとすれば同じように、当時、六器を供養具として使用していたことも考えられるのではないだろうか。また、はじめから宗独自の仏具があったわけではないであろうから、既存の仏具を移行して使用していたという可能性も考えられる。

作品に描かれたような供養風景を等伯は実際に目にしたのだろうか。六器が描かれる作品が説法図だけに限られ、ほぼ同じ構図で描かれる作品が多いことから、等伯が制作するにあたって手本にした作品があった可能性もある。その作品に六器が描かれていて、それを忠実に模したということも考えられるだろう。しかし、六器が法華寺院で全く使用されていない他宗の供養具であったとしたら、それらが画像に描き込まれることを、作品の依頼主や寺院側が受け入れるとも考えにくい。

等伯は、養父・宗清から絵の手ほどきを受けたといわれている。宗清が描いた石川・成隆寺日蓮聖人画像には、宗清の落款と共に、「信春」の印も確認でき、宗清の作品制作に等伯が関わっていた、もしくは補助的な役割をしていたことが窺われる。等伯が描いた大法寺画像、本住寺画像に描かれる日蓮聖人の姿は、宗清が描いた成隆寺画像の日蓮聖人の姿と似ているが、宗清が描いた日蓮聖人の前には鈴・法華経・柄香炉が置かれる机があるだけで、その前に小さな机は描かれず、六器も描かれていない。また等伯が描いた法華経本尊曼荼羅図に描かれる日蓮聖人は、宗清が描いた石川・蓮乗寺宝塔絵曼荼羅に描かれる日蓮聖人の姿と酷似しているにもかかわらず、宗清が描いた日蓮聖人の前には鈴・法華経・柄香炉などが置かれる机のみで、その前に小さな机は描かれず、六器も描かれていない。⁽²²⁾ 等伯は宗清が描いた日蓮聖人画像を手本としつつ、礼拝の対象として、より一層荘嚴を増すために六器を描き加えたのだろうか。

等伯没後四百年を契機に調査が進められ、近年、等伯作品や等伯に関連する絵師たちの作品が次々と新しく発見されている。今後、より多くの作品を対象にして考察してゆく必要があると考える。

註

- (1) 「信春」は号と解すれば「しんしゅん」と読めるが、名と解すれば「のぶはる」と読むことになる。どちらとも断定し難いが、現在は名と解して「のぶはる」と読まれることが多い。
- (2) (3) 作者を示す落款印章はないが、画風の検討から等伯が信春時代に描いた作品と判断されている。
- (4) 礼盤、経机、過去帳、曲桌、二豊台など。
- (5) 坂輪宣教『仏教美術の廻廊』 宝文館 一九八四
- (6) 二〇一四年発行『長谷川等伯展』その多彩な画業』 図録の大法寺日蓮聖人画像の作品解説の中でこれらの仏器を指して「六器」と記述されている。また二〇一一年八月発行『長谷川等伯展』「信春時代」―等伯のプレリユード』 図録では等伯筆石川・本住寺日蓮聖人画像、二〇一二年八月発行『長谷川等伯展』圓徳院の「山水図襖」を中心に』 図録では等伯筆京都・立本寺日経上人像について、像主の前に描かれる六個の同形の仏器を指して「六器」と記述されている。
- (7) (8) 岡崎讓治監修『仏具大事典』 鎌倉新書 一九八二
- (9) 『大正新修大藏経』第十九卷 NO.1000
- (10) 註(7) 参照

(11) 作者を示す落款印章はないが画風の検討から長谷川派の一人、長谷川等誉の作品と考えられている。等誉についての文献資料は少ないが、七尾市長壽寺過去帳廿六日の項に「寛永十三年正月繪師／等誉／長谷川」との記載がある。長壽寺は長谷川家の菩提寺であるが、等伯と縁戚関係にあったかどうかは不明である。

(12) 個人蔵

(13) 等伯の落款印章はなく、画風の検討から等伯が信春時代に描いた作品と考えられているが、等伯周辺画家の作品とする説もあり、作者・制作年については検討の余地がある（長谷川等伯展「圓徳院の「山水図襖」を中心に」七尾美術館 二〇一二年）。

(14) 福井本境寺絵曼荼羅に描かれる仏器を「六器ではない」とする見方もある（岡崎讓治監修『仏具大事典』「日蓮宗の仏具」の項脚注11）。

(15) 『日蓮宗宗学全書』第十九卷 史伝旧記部（二）

(16) 註（5）参照

(17) 妙法華寺画像では一尊四土の前に置かれていた六器が、大法寺画像では日蓮聖人の前に描かれるようになったことについて坂輪宣敬氏は、日蓮聖人が明確に礼拝対象になっていることを示すものであり、六器が描かれたのは礼拝対象としての画像に莊嚴味を付け加えるためであろうと推測されている。

(18) 「法然上人行状絵図」「融通念仏縁起」「慕帰絵詞」「当麻曼荼羅縁起」「稚児観音縁起」「二月堂縁起」「石山寺縁起」など。

(19) 法然上人行状絵図で六器が描かれる箇所として十八カ所が確認できるが、そのうち十二カ所で六器に楯の

葉が浮かべられていることが確認できる（樺の葉の表現は、緑の顔料をほんの少し、筆の先でちゃんと付けただけの箇所もある）。

(20) 『日蓮宗宗学全書』 第二巻

(21) 松村寿厳「日蓮宗と仏具―その受容時期をめぐって―」『日蓮教学研究紀要』第6号 立正大学日蓮教学研究所 一九七九・三

(22) 宗清が日蓮聖人を描いた作品としてもう一点、富山・妙傳寺日蓮聖人画像があるが、この作品にも六器は描かれていない。

〈キーワード〉 長谷川等伯 信春 六器 日蓮聖人画像 密教法具

参考文献

- ・岡崎讓治監修『仏具大事典』 鎌倉新書 一九八二
- ・石田茂作『新版仏教考古学講座』第五巻 雄山閣 一九八四
- ・阪田宗彦『密教法具』（日本の美術282） 至文堂 一九八九
- ・中村元・久野健『仏教美術事典』 東京書籍 二〇〇二
- ・田中豊蔵「日蓮上人説法図」〔日本美術の研究〕 一九六〇
- ・松村寿厳「日蓮宗と仏具―その受容時期をめぐって―」

『日蓮教学研究所紀要』第6号 立正大学日蓮教学研究 所

- ・坂輪宣教『仏教美術の廻廊』 宝文館 一九八四
- ・小松茂美『日蓮聖人註画讃』 中央公論社 一九九三
- ・『大日蓮展』図録 東京国立博物館 二〇〇三
- ・『日蓮と法華の名宝』図録 京都国立博物館 二〇〇九
- ・『没後四〇〇年長谷川等伯展』図録 毎日新聞社 二〇一〇
- ・『長谷川等伯展』信春時代のプレリユード』 七尾美術館 二〇一一
- ・『長谷川等伯ふるさと調査事業報告書』北國新聞社・のど共栄信用金庫 二〇一二
- ・『法然上人絵伝』(続日本絵巻大成1〜3) 中央公論社 一九八一
- ・梶谷亮治『僧侶の肖像』(日本の美術388) 至文堂 一九九八
- ・『最澄と天台の国宝』図録 読売新聞社 二〇〇五
- ・『日蓮宗事典』 日蓮宗宗務院 一九八一